Kobe Shoin Women's University Repository

Title	追悼の辞
Author(s)	黒澤　一晃
Citation	研究紀要（SHOIN REVIEW），第 28 号：i-ii
Issue Date	1986
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	付録（写真資料）あり。

追悼の辞

学長　黒澤一晃

私どもの敬愛する平島達司教授には、昭和六十一年三月十一日早朝、脳溢血のため急逝されました。痛恨の極みであります。享年七十三歳でありました。

先生は、昭和十一年三月東京帝国大学理学部化学科をご卒業後、三菱砿業研究所技師として当時最先端にあった石炭油化の研究に従事されたのち、陸軍技術将校として陸軍燃料敞にて引き続きその研究を続けられ、終戦後は合成化学ならびに医薬品合成に関する研究所を経営され、自らも研究者として、化学の研究に従事されました。昭和三十五年四月、家政科設立に際して松蔭短期大学に奉職され、その後三十六年の長きにわたって、研究と教育を通じて本学の発展のために献身されたのであります。

その間つねに慈父のごとく学生の指導・教育に専念された先生は、短期大学学生部長・同図書館長・学院理事などを歴任され、本学の教育行政に参加されるとともに、学院の運営にも貢献されたのであります。

学者としての先生の活躍は、大きく二つの分野にわたっています。一つは、化学者としてのご活躍であり、い

ま一つは、音響学の研究家としてのご活躍であります。すなわち先生は、本学「研究紀要」第二号に、『触媒に関する研究(第1報)』を発表されて以来引き続き数々の化学論文を発表されていたのでありますが、突如として華麗なる転身を遂げられ、「研究紀要」第十号に掲載された『音波の位相』の問題にはじまり、次々とパイプ・オルガンの音響に関する論文を発表されるにいたったのでありますが、遂にその研究は『オルガンの歴史とその原理――歴史的オルガン再現のための資料』ならびに『ゼロ・ビートの再発見(上・下)』に昇華されるのであります。

私が、先生のご著述のなかに常に感じたものは、科学者としての緻密さでありました。先生の主著である上記『オルガンの歴史とその原理』は、オルガンの調律における論争を科学者の目をもって論理づけられたものでありました。そしてその原理は本学チャペルに建造されたパイプ・オルガンに見事に具現化されているのです。先生の主張された「古典調律」は決して先生だけの理論ではありません。しかし、その主張のなかに見られる論理性は何びとといえども追随できないものでありました。そして今、私たちは日々の礼拝に際してこのオルガンの音色を聞くたびに、科学者としての平島先生を懐かしく想起いたしています。

ここに先生の生前の学問的ご功績を讃え、本号を「平島達司先生追悼号」として、故平島達司先生に捧げる次第であります。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

平島達司先生近影